



本号の内容

巻頭言 : 野澤令照副会長 「融合研の底力を感じて」

- 1 「第9回学社融合フォーラム in 高知」の記録
- 2 「第10回学社融合フォーラム in 東京」の準備が始まりました。
- 3 融合研設立10周年記念事業を行います
- 4 役員会議より
- 5 東北フォーラム・地域子ども教室東日本会議の概要
- 6 島根「こどもフォーラム」・地域子ども教室西日本会議の概要

巻頭言

「融合研の底力を感じて」 副会長 野澤 令照

今年も残すところわずかです。北海道・東北では、純白の雪が舞う季節となりました。皆様には、いかがお過ごしでしょうか。今年も全国各地で様々な実践がなされておりますが、融合メールを通して報告される各地の熱い取り組みに日々刺激を受けながら、ようし今度は自分もと意欲を燃やしている方も多いのではないのでしょうか。

さて、思い起こせば南国土佐で開催された高知フォーラムから、早3ヶ月が過ぎました。会場となった「海の果樹園」で汗を流しながら熱く語り合い、大いに盛り上がった日が懐かしく思い出されます。高知の皆様、関係者の皆様、本当にご苦労様でした。竜馬のふるさとで開催された全国フォーラムが、地元高知を中心に融合の火種を大きく育てる役割を果たしたことは間違いありません。学社融合を志向する一人として、とても嬉しく思っております。

今年取り組んだ「ゆうごう子ども教室」も着実に成果を残しています。全国26の子ども教室が、それぞれの地域でユニークな活動を展開し、学社融合の実践を各地に広める大きな力となりました。文部科学省の担当者からも実践資料の提供を求められるほど充実した活動になっておりますが、これも融合研としての理念を明確に打ち出し、それぞれの地域の会員が陰になり表になり活動を支えたからこそできたことです。改めて融合研の底力を感じさせられました。

先月、仙台で開催した「学社融合フォーラム in 仙台」ですが、これは東北支部フォーラムと子ども教室の東日本ブロック研修会を兼ねたものでした。参加者は、融合研会員、子ども教室関係者、そして地元仙台の方々と合わせて140名ほどになりましたが、北は北海道・歌登、稚内、南は四国徳島からと全国から集まっていただき、盛会のうちに無事終了することができました。

ゆうごう子ども教室の実践報告はバラエティに富んでおり、どれ一つとして同じような内容のものはありませんでした。地域の特性、メンバーの構成、そして活動内容、とても興味深い報告が続き、参加した子ども教室関係者にとっても大いに意義のある研修会になりました。

影響を受けたのは、融合研・子ども教室関係者だけではなく、会場となった地元仙台の参加者からも大きな反響がありました。融合MLでも紹介しましたが、次のような感想が寄せられました。

「融合研ってすごい集まりですね。こんなに凄いいと思いませんでした。」(地元、社会教育主事の一人)

「とても素晴らしい出会いが、たくさんありました。ありがとう。」(黒松・親父の会のおとうさん)

「全国から、こんなにたくさんの方が。うれしいね。」(地元・学区体振の代表)

「とっても楽しかった。いろんな方と出会えて、すごく嬉しかったです。」(黒松・子ども会育成会のお母さん)

「構えないで何でも言い合えるって、いいですねえ。大好き。」(仙台:いろいろな市民活動に取り組んでいる女性)

今回、開催地仙台にもたらされたものは、とても大きいものがございました。その一つとして会場となった小学校地元の参加者を中心に活動の気運が盛り上がり、新たにゆうこう子ども教室が立ち上がりました。今は試行の段階ですが、既に3回の教室を開催し、来年度の本格実施へ向けて着々と準備を進めているところです。活動のキーパーソンとなっている女性が、フォーラムで出会った融合研の会員の方々や子ども教室の方々から実践に裏打ちされたお話を伺うことができるとも勉強になったと喜んでおりました。理論だけを取りざたするのではなく、日々の実践を大切にしている融合研の仲間だからこそ発揮できる影響力を感じ、私も嬉しくなりました。

さあ、来年は融合研発足10年目を前にして原点に戻る意味の「東京大会」を控えています。既に、本部を中心に準備委員会も動き出します。これまで積み重ねてきた融合研の取り組みを会員全員で振り返り、さらに大きく飛躍するステップになるような大会になります。皆様のご協力をお願い致します。

1 第9回学社融合フォーラム in 高知の記録

第9回目の学社融合フォーラムが、四国ではじめて開催されました。記録をごらんください。

1. 名称：竜馬のふるさと・融合フォーラム2005 in 高知～学社融合維新の夜明けぜよ～

2. 全体テーマ 「学校と地域を結ぶコーディネート力」とは

3. 主催：学校と地域の融合教育研究会・融合フォーラム2005 in 高知実行委員会

4. 共催：高知県教育委員会・夜須町教育委員会

5. 後援：各地教委・NPO・社会福祉協議会など

6. 場所：海辺の果樹園（高知県香美郡夜須町）

7. 日程

第1日目 8月27日(土)

12:00 受付

13:00 開会 基調提言～大会の主旨と課題提起

13:30 パネルディスカッション トーク&トーク 「はじめての学社融合」

15:30 分科会

はじめての学社融合

学社融合のコーディネートを考える

協働で作る学校と地域の安全

学校の自立と地域の協働

学校図書館活動と読書ボランティア活動を考える

学校と地域を結ぶPTA活動、おやじの会活動

18:00 屋台フォーラム(ポスターセッション 全国各地の実践ミニ発表)・懇親会

第2日目 8月28日(日)

9:00 分科会報告

9:45 パネルディスカッション 「学校と地域を結ぶコーディネート力とは」

12:00 閉会

13:00～ 文部科学省委嘱事業「地域子ども教室の取り組みについて」の事例発表を行いました。

パネルディスカッション トーク&トーク「はじめての学社融合」

進行：濱田陽治

コーディネータ：越田幸洋

パネラー：大崎博澄（高知県教育長）・矢吹正徳（日本教育新聞）・藤尾智子（岩手県紫波町職員）・木村泰子（大阪市小学校長）

（木村）2～3年前に雑誌等で「学社融合」ということばを知り、2003年の大阪での教育セミナーに参加。それまで何とか学校を変えたいと悶々としていた時、このセミナーの参加によって目の前が開けた。正直、立場や考え方の違う人々が同じフィールドの場で学ぶという融合研の目的に対して半信半疑であったが、セミナーへの参加やフォーラムに参加したことにより考えかたが一変した。

（藤尾）学社融合の魅力はフラットな関係であること、肩書きではなく一人の人間としてフロアに立てることである。「先生」という肩書きを気にすることなく自然と声をかけることのできる関係を築くことが出来ることである。

（矢吹）生涯学習社会についてS63年～H10年にかけて町づくり活動とボランティアを行ってきた。かつて学校は学校、社会の協力を得ることなど考えられなかった。H7年、秋津小学校での取り組み取材し、行政主導ではなく住民主導ということに非常に感銘した。

（大崎）中山間地域の農業を守りたい。子どもの命と尊厳を守ることが大事であるということ現場の教師の胸に刻んで欲しいと望んでいる。学社融合という言葉は5～6年前から知っていて、2004年の盛岡フォーラムに参加した職員から「衝撃を受けた」ことを聞いていた。今回の高知でのフォーラムに全国から多くの人が集まり、またボランティアとして県内の大学生の協力を得ることができたことは大変うれしく思う。まだまだ高知の教育もすてたものではない。

子どもという希望

（大崎）教育をめぐる環境が悪化しつつある。

- ・社会そのもののモラル破壊、住みにくい世の中 安心できない世の中
- ・社会基盤が脅かされている 不況、環境破壊

これらを乗り越えるには、本来もっている子どもたちの力が開花できるサポートが必要。

（木村）おとながどんな策を作っても子どもたちが何よりの決定力となる。＝子どもは地域の宝

（藤尾）地域の笑顔は子どもの未来

（矢吹）地域と学校の両方のキーパーソンがうまく働いていれば良いのだが、つながりがうまくいっていないところがまだまだある。学校と地域の方向性が一致すること（共有化）により学社融合は力を発揮する。ある荒れた学校では生徒に授業を受けさせたいという同じベクトルに思いが向いていたため、地域と学校の協力が円滑に進んだ。いまコーディネートはなぜ必要かということについては、教師の空き時間が少ないため活動が制限されるという問題が出てくる。そのなかで活動外のことを行うことは教師の大きな負担となることから、変わりに主婦らがコーディネータとなり教師をサポートする。そこに地域と学校の助け合いが生まれ、連携が円滑に行われる。

*意識調査

Q 自分の地域と学校の連携がうまくいっているか？

YES 59人 / NO 78人

教師は地域をどうとらえているか

高知の抱える教育の問題として学力の問題が挙げられている。地域の教育力と学力を取り入れるべきなのだが、教師のプロ意識の壁が邪魔をしてうまく思いを共有化できないのが現状である。ゆとり教育の取り組みが施行されたことにより、授業時間の確保のため学校側は多忙で余裕がない。

（木村）多くの人が多忙というが、それはきちんとした優先順位がつけられていないがためであって、教師の役割として現代の子どもに必要な授業を提供しなければいけない。教育者としてのおごり・使命感を捨てること。子どもから学ぶという意識をもつことが大事である。地域の人の存在があるだけで生徒は変わることができ、地域の人々と関わるだけで子どもは変わるので、地域の

人々にいつでもきてもらえるような学校を目指す。そうするには、指導力の無さを暴露されるのを恐れて地域の介入を拒む教師が多い今、まず教師が変わることが必要なのではないか。地域と子どもが関わることによって学校・地域・子どもたちなど全ての人々が得るものが大きい。昔と比べると共同意識は高くなってきている。かつては学校の授業の中に地域社会を取り入れて展開することは無かった。

* 記録者所感

開かれた学校づくり・授業評価など様々な学校問題を解決するにはやはり学校長を中心とした教員の連携、教育現場である学校と地域の連携が重要になってくるのではないだろうか。

凶悪犯罪が多発し、多くの学校はその門を堅く閉ざしている。ただでさえ地域との交流が希薄化しているこの社会、そんな今だからこそ地域と学校が関わり合い子供たちを守っていかねばならない。かつての日本に見ることが出来た地域の大人と子どもたちの良い関わりは、時代が変わるにつれて確実に薄れていっているように思う。今、子どもたちに大人の姿は見えていない。やはり子どもは大人の姿を見て成長していくものだと思う。学校で、地域社会で多くの人々とのふれ合いの中で、その酸いも甘いも実際に経験することで子どもたちは自ずと答えを出すものなのである。それこそが子どもたちが本来持つ力であり、これからの日本を変えていく力と成り得るものであると考える。その力を引き出すか出さないかは、これからの私たちの行動にかかっている。その点でもこの学社融合の取り組みは大きな柱となるであろうことは確実である。学社融合で革命を！！！！

分科会 1 「はじめての学社融合」

コーディネータ (渡邊喜久：静岡県)

分科会担当者 (中野博文：高知県)

発表者 (片山弘紀：高知県、中川洋太：神奈川県、大畑伸幸：島根県)

学生サポーター (岡村：記録、藤原：デジカメ)



片山 弘紀氏 (旭東小学校)

初めての学社融合

学社融合のきっかけは、小学校の児童数の減少をくい止めるために融合フォーラムを開催したことだった。最初に立ち上げたのは「オヤジの会」。地域教育コーディネータ養成講座というものを開いた。

- ・バザーでピエロ作り

- ・段ボールハウスイベントというものを行った
 - 段ボールを使って自分の思い通りの家を作る
 - 夕食会や星座のお話やキャンプファイヤーなども行った
 - 旭東小学校と馬路小学校との交流キャンプ
 - ・流しそうめんや川泳ぎなどを体験した
 - 朝のあいさつ運動
 - 子どもの居場所づくり構想 = 「旭東っこ教室」
 - ・子どもを育てると同時に大人も育てる
- 保護者と地域の大人たちが手を取り合って、みんなで子どもを育てていくことが必要。
無関心、無責任、利己主義では子どもは育てられない！

中川 洋太氏

- 小学校と中学校をまとめて社会作りを行っていく
コーディネータによる壁画プロジェクト（落書きされた壁にペインティングする）
- ・町が出来て20年経ち、学生の行事への参加が少ないので、中学生へボランティア活動を促した。
 - ・子どもを主体的に考えるにはどうすれば良いか？ということを考えるようになった。
子どもをよく知っている先生を地域に取り入れることで活動がスムーズになる。
学校以外の場で先生が活動することで、今までにはなかったアイデアなどもうまれた。
よくある大人が考えて子どもが色を塗るだけのペインティングではなくて、まず落書きという行為の意味を考える。
子どもたちが物事を考えてから、子どもたちが中心となってペインティングを行った。
コーディネータがいると活動がスムーズになる

大畑 伸幸氏

- ボランティアハウス
- ・学校の授業に地域の方が入ることによって大人が子ども知る切っ掛けになる。
 - ・ボランティアはやる気だけでは行うことは出来ないなので、場を提供する。
 - ・地域の中心にある学校を使う。学校は施設も整っているので、地域の方も利用しやすい。
 - ・現場を中心に考え、臨機応変に対応することで次にも繋がる。
 - ・地域の社会教育の差が広がっている。なにをすれば皆が喜ぶことができるのかということを考える。
 - ・ボランティアにとって、子どもにとって、地域の人にとって、それぞれが無理なく行えるようにしなければならない。
 - ・マネジメントで大事なものは遠くの人から評価されることをすれば、自ずと周りに仲間が出来る。
- ~~~~~ 話し合い ~~~~~
~~~~~

### （ は出てきた意見、Aはそれに対する応答 ）

#### 学校と地域が協力して夏祭りを開催

- ・学校と地域の考えが合わない。（お互いがお互いにやってあげているという意識）
  - ・役員と参加者の意識の違いがあり、皆が皆「自分たちの祭り」という気持ちではないように思える。
- A：熱の差があるのはあたりまえと考えると、如何にそれを解消するかということを考える。  
子どもを自発的に動かすには、視点を変えてみたりする。
- A：物事自体を考えるのではなくて役割というものを考え本質を教えてあげることが大事。
- A：子ども達に自由を与えてあげると、活動しやすくなり褒めてあげることも容易になる。

#### 遊び塾というものを学校で行っている

- ・土曜日に子どもたちを集めているんな行動をする
- ・地域の人によるソバ作りを行おうとしたが、学校側に断られてしまった
- ・どうすれば学社融合をスムーズに行うことができるのか？

A：学校にとっても地域にとっても極力負担をなくすようにしなければならない。

(例)生涯学習を發揮する場所を学校の子どもたちにするなど。

### ありのままの子どもを見て欲しい

- ・子どもが学校から出た時の姿を見て欲しい
- ・学校で見せる顔とは違った子ども達の一面を見ることができる
- ・学校での子ども達も見て欲しいので1学期間だけ学校を公開した

A：学校が動かなければ学社融合は進まない、社会も学校を理解していない

A：そういった背景を理解することで、学社融合も進みやすい

### どのようなアプローチを行えば学社融合が進むのか

A：PTA や学校がどのようなことを行えるのかということを確認にしてあげる

A：合同研修会などを行い、理解を示す

### 学校と地域の感覚の違い

- ・学校はきれいに取り組みが成されているが、融通がきかない
- ・地域はアバウトだが、融通がきく
- ・学校のカリキュラムに沿った活動が受け入れられやすい



### 記録者の感想

今でこそフォーラムを開催するほど大規模なものになっているが、学社融合にも始まりがあったということを改めて知ることができた。そして、その始まりは多種多様なもので活動内容が異なるのはもちろんのこと、その思惑すらも違うというのには驚いた。発表者の方からは、バザーや小学校間の交流などを通して人を育てた話、ペインティング作業の本質を子ども達に知ってもらった話、とにかく地域と学校が協力して学社融合を行った話と様々な話を聞くことができた。それに刺激されるように話し合いの場ではみんなが自分の体験を話し、その話題について意見を交換し合い、部屋のみんなが一つになって学社融合を促進することが出来ていて有意義な場となっていた。しかし、学社融合はまだまだ浸透しているとは言えないので、これからもみんなが力を合わせて活動を続けていき、フォーラムの開催も続けて欲しい。

## 分科会2 「学社融合のコーディネータを考える」

### 矢野晴規さん(高知県津野町)

高知県高岡郡津野町立葉山小学校 元 葉山村地域教育指導主事

## 「地域教育指導主事の目指したもの」

地域教育指導主事制度のスタート

- ・教員の資質、指導力の向上
- ・子どもたちの基礎学力の定着と学力向上
- ・学校、家庭、地域の連携による教育力の向上

高知県が全国に先駆けて「地域教育指導主事」制度を作り出した！

役割

- ・教育改革の障害...委員会と学校現場との間の壁
- ・派遣先によりニーズが違う

取り組み

- ・人と多く出会い、PRに努めた...学校に対しての要望を地域の方からたくさん聞いた
- ・学校には常に足を運ぶ
- ・地域の催しものには、しつこいぐらい顔を出す
- ・地域の要望を学校に伝える、学校の要望を地域に伝える

地域ぐるみの教育の現状

- ・子どもからおとなまで繋がることのできる場の設定
- ・地域教育指導主事が果してきた役割の重要性

## 山中千枝子さん（高知県）

越知町立越知小学校 校長

高知ワークショップをつくる会 代表

「野老山おとなの学校」

おとなの学校

地域の力を学校にもっていきたい。

子どもとおとなが学校というステージで同居したい

平成14年に地域の社会教育の場として越知町立野老山小学校に設立

- ・学校は地域の文化発信基地
- ・学校に来る人が子どもからおとなにかわっただけ
- ・いつもサポートされる子どもとサポートするおとなの関係を壊すことからスタート
- ・自信を持って行動する子ども達と潜在化している地域の教育力を学校というステージで開花させる

る

- ・学校教育と社会教育の同時進行
- ・児童が学習している時間に「おとなの学校」を同時開催
- ・常時の自由参観と放課後の学校を楽しむ

平成16年に生涯学習発信基地「野老山おとなの学校」としてスタート

人が人として輝ける場所を目指す

## 榎谷佳純さん（大阪府摂津市）

大阪府地域コーディネータ連絡協議会

「大阪府地域コーディネータ」

すこやかネット

- ・地域に思いを持った人を作り出そう
- ・大阪市以外の334の中学校にすこやかネット形成
- ・各中学校区に地域コーディネータ3名ずつ育成
- ・空き教室を利用しているいろいろな団体に使ってもらう
- ・いろいろな考えを述べる場である そういうきっかけをつくる場
- ・子ども110番 ウォークラリー

地域の家になどどんな人が住んでいるかわかるようになる

## 記録者の感想

学校中心の祭りや家庭科の実技に地域のおばさんに参加してもらうなど、葉山小学校の取り組みは重要なものであったと思う。家庭での子どもとおとな（老人）のふれあいの場が減っている今、学校を通してのこの活動は、これからさらに必要になってくると思う。「おとなの学校」の取り組みについても同様のことが言えると思う。休校になった野老山小学校の話は前に聞いたことがあったが、その後のこのような活動については全く知らなかった。地域の文化の発信基地として学校という場の重要性をぜひとも子どもを含めたくさんの人に広めて欲しいと思う。学社融合という視点で考えたときに学校と地域を結びつけるコーディネータを育成するための人物、また組織というものは大きな意味を持ってくる。この大阪府の取り組みは、これからの学社融合の活動にあたって重要になってくると思う。人件費や人材育成、環境を維持するには様々な課題があるが、ぜひとも今回のフォーラムを生かして継続して行って欲しいと思う。

### 分科会3 「協働で作る学校や地域の安全」

#### 岡敦子さん

大津小学校の防災教育で過去の水害を受けて大津を災害の強い町にしたいということで防災力をつけるプロジェクト学習が行われている。中身は一年生から六年生が一緒になってまず防災の話を聞く炊き出し体験をする救急法の訓練などの準備に始まり、その後5、6人の同じテーマを持ったチームを作り製作しプレゼンをする。それを子供防災訓練やホームページで掲載したりなどで地域に発信している。さらにそこで6年生から5年生に救急法の方法が伝承されている。さらに、危険予知トレーニングを子供にしている。学校生活に密着にしたところから始めてどんな危険が潜んでいるか考えて、次どんなことが起こるかを考えていき、イメージ力UPにつながる。

#### 車育子さん

秋津では夏休みの防災訓練もかねたキャンプをしている。特色としては地域から学校に入っていく。対象は幼稚園児からで、毎年やりたいことをして無理なく毎継続している。幼稚園児から始めている子供は、中学生になっても続けてやるという成果が出ている。さらに20周年ウォークラリーを機に、井戸の点検をしたりする防災ウォークラリーがはじめられた。井戸を掘って防災風呂を作るところで中学生が小学生の面倒を見るということも見られる。最後に防災とは普段から地域が学校を使うことでいざという時の場面をつくっておいてその時にすみやかに行動ができるようにしておくことである。

#### 柳昌孝さん

学校の安全をどうするかということで、初富小学校での取り組みを紹介する。まず、1人1㎡の畑を子供が持って、子供と親と一緒に耕すことで親同士が顔見知りになる。その次に不審者をどうするかといことでは教員がトランシーバーをもっていて不審者が入るとすぐに校内放送ができ、さらに子供に防犯ベルを持たせることで避ける。4年生がごみの問題を考えたりするとき学校の中だけでなく、公園のごみ問題を考えることで子供が地域に働きかける。子供が働きかけることによって親の考え方も変わる。学校を中心として地域と家庭が教育力をつけることが課題。

#### 記録者の感想

僕が聞いた中では子供の中には地震を怖がっている子供がけっこういました。何でそうなのか考えてみると、子供たちには地震が起きたときどうしたらいいかわからないからだと思いました。ニュースや新聞などで南海地震に備えるための情報を多くしているけど、こどもにしてみたらやはり自分たちでどういうことが危険なのか考えて、実際訓練をしてみるなどをしていないので不安になるのだと思いました。今日聴いた話の中では上級生が下級生に教えているということがあり、それはかなり有益だなと思いました。それは子供からしたら少しお兄さん、お姉さんに教えてもらうのが一番わかりやすいからです。防災とは近所の人の影響が一番大きいと思います。しかし学生は地域から独立しています。



身近な人との関わりあいをどうしていくかこれから自分でも考えていきたい。

## 分科会4 「学校の自主と地域との協働」

担当者：岡崎

コーディネータ：野澤

発表者：高知商業高校・岡崎・堀越

記録者：女子大・佐藤

デジカメ撮影：学園短大・浜川



### (1) 事例発表1 「高知商業高校の取り組み～ラオス学校建設活動～」

#### 【活動の流れ】

1994年に始まり、1996年に株式会社を設立

この活動をもっと地域の人に知ってもらいたい！

1998年...百貨店でラオス商品の販売を始め、2000年には商店街にも進出。

ここでも収益はラオスで学校を建設する資金にした。

#### 【国際フェスティバルの企画】

・学校と世界と地域とが一体になった取り組み

(県内在住の外国人の方々・ALTの方々・商店街の方々・地域の方々の協力)

ex.) 商店街：接客の極意や商品ディスプレイの方法を教えてください

地域：衣装の協力もあって国際ファッションショーの開催も・・・

世界観が変わった！！

ことばと文化の壁を越えていけるのだ

#### 【ラオス訪問】

・ラオス商品の仕入れ(販売・収益を建設資金にする)

・ラオスの子どもたちと交流

国際活動だけでなく、心の交流ができた。自分たちも成長できた。

このことを高知の人々に伝えたい！！

#### 【エコの実プロジェクト】

エコバックの作成・販売

目的1：学校建設活動の継続と発展のため

目的2：未来の地球環境問題を考えるきっかけにしたい

ラオスの伝統的な布を用いて作れないか??

はりまや商店街の協力!...手芸店を通じて、話を聞いた地元の人々も協力したいと要請

人と人とのつながりの大切さを知った!!

これらの活動は高知商業高校の執行部だけの力で出来たのではない。

ラオス・地域の人々・はりまや商店街の支え、連携があってこそ継続できたこと!!

## (2) 事例発表2「足立区の教育改革」

- ・7県9校の実践校の一つとして選ばれた
- ・開かれた学校づくり...HP作成・掲示板など
- 土佐の教育改革（開かれた学校づくり 授業評価）と同様の取り組みも・・・
- 教員の気持ちとしては「自分が評価する>自分が評価される」=抵抗がある

### 【学校における新しい取り組み】

二期制（仙台・千葉...）...学校側としても動きやすくなる。中から学校を変えていこう。

小中一貫（広島・品川区...）...足立区では併設型で来年からスタート

6・3制から4・3・2制へ

民間人校長の採用...五反野小学校・三原校長など

校長会は民間人校長には厳しい

現場を変えるためには...？

「校長の意識を変え、校長会の意識を変える必要がある！」

学校理事制の導入

...教育課程の編成から理事が携わる

理事 = 保護者・地域住民も含まれる

= 教育課程の編成に保護者・地域住民が関わる！！

・「コアの部分だけで教育計画を作るのは地域や保護者にとって総意なのか??」

学校理事制は外の声・考え方を学校の中に取り入れていける！

これらの新しい取り組みはすべて子どもたちのために！！！！

## (3) 質疑応答・感想等

### 【事例発表1に関して...】

Q.活動における指導体制は？

A.スタート時は岡崎さん一人。ここまで継続できたのはスタッフ10人がいたから。

コーディネートする上でスタッフの力は大きかった。

Q.活動が出来上がるまで、校内で抵抗があったと思うが、それを乗り越えるポイントは？

A.内部評価はなかなか上がらず、見る目が厳しいもの。それを解き放ったのがPTAなどの外部評価。外部評価を積極的に取り入れることで内部評価が変わっていくのでは？

Q.子どもたちを変えたものは？

A.バーチャルではなくリアルを体験させたことが大きいのでは。妥協を許さず厳しさも受け止めさせ、それを乗り越えたときに子どもたちが変わり始めた。

Q.地域が変わってきたところは？

A.始めはやはり取り合ってくれなかった。しかし一方的な依頼ではなく、お互いに利益がある話だったことが大きかったのでは。お互いのGIVEがあって変わってきた。

Q.教師の役割に関する考えが変わった、その持論は？

A.始めは自分が生徒をグイグイとひっぱっていきこうとしていた。しかし自分の知らない状況に立ったとき、生徒と一緒にやってみないとわからないと思った。

### 【事例発表2に関して...】

Q.学校理事会が出来たことでの校長の立場は？

A.学校理事会はやはり強い。校長も理事の一人としてやっているけれど...。教育課程の編成には校長の考えがやっぱり必要。



#### (4) 記録者がフォーラムを通して感じたこと...

学校と地域の融合...初めて聞いたときはまったく掴めなかったのが本当のところである。学校は学校、地域は地域...少なくともわたしのまわりでは両者が連携して何かを行っていた記憶がない。融合といわれてもイメージできなかつたのが実際のところである。

今回のフォーラム、殊に高知商業高校の取り組みの事例には非常に驚かされた。学校だけの取り組みから地域の人々の手助けを得て、ここまで出来るものなのか。ただただ驚くばかりだった。「地域の人々の助けがなければ活動は継続していなかっただろう。活動を通して人と人とのつながりの大切さも知れた。」この生徒さんの一言をきいて、なるほど、これが学校と地域の融合なのかと感じた。また民間人校長の話など教職を目指す身として興味深い話がたくさん聞けたのもよかったと思う。

今回はボランティアという立場であったが、いままで考えていたことのなかつた学社融合という考え方に出会い大変貴重な経験が出来た。時間があれば6つすべての分科会を見て回りたいかった。たくさんのお話を吸収でき、有意義な時間が過ぎてうれしく思う。想像以上に多くのことを学び取れたとフォーラムであった。

関係者の皆様、本当にありがとうございました。

### 分科会5 「学校図書館活動と読書ボランティアの融合を考える」

コーディネータ：上農 分科会担当：西村・吉永

発表者：細川・安藤・松村

記録作成者：岡本 デジカメ：山岡

#### 1、「ないないづくしの図書館改装」 安藤公子

< 動機 >

転勤した学校で図書担当となるが、ないないづくしの図書館に落胆し、改装しようと決意する。

“ないないづくし”とは？

- ・ 本が古い本しかない。(子どもが読まない本は、ないのと同じ)
- ・ 暗くて、寒い
- ・ 部屋は、普通教室を転用しただけ  
読みたい本がある

選書を教員がするのではなく、子どもがする。(選書会の導入)

3年目の選書会では、子どもが受身ではなく、事前にどんな本を図書室に入れようか考えるようになった。

明るく親しみやすい(居心地の良い)

予算4万円のため、皆の手作りで改装する。

廃棄する本棚をペンキ塗りして、再利用する。壁にペンキを塗る。

子どもも教師も、自分達の図書館という意識が生まれる。

わかりやすく利用しやすい。

数字のラベルをやめて、絵で分類するラベルを採用する。

本を返す場所がわかりやすくなる。

改装する中で、図書室に古い紙芝居を発見。

大人にとっては、懐かしい紙芝居 地域へ貸し出し

子どもに紙芝居のよさを伝えたい 紙芝居おじさんによる紙芝居サークルの結成

## 2、「おはなしボランティアさんとともに」 細川佳南

土佐町教育委員会で読書活動を推進するため「おはなしボランティア」研修会を実施。

対象は、大人・高校生・小学生で、小学生の研修会では、“読み聞かせの実践 反省会 次に向けての選書 読み聞かせの実施”を繰り返したことで、みるみる上達した。

おはなしボランティアの活動は、小学校の朝の読書タイム、放課後、夏休みなどを利用して行われている。この中で、本だけでなく、わらべうたや手遊びも含め、子どもたちと交流を図っている。また、子どもたちに長文を読んでもらう為に、長い本を一貫して朝の読書タイムで読む活動もしている。

## 3、「読み聞かせボランティアから始まって」 松村雅子

活動理念として、自分を差し出すのではなく、物語自体を差し出すこと。本をよんでもらうと面白い、という耳で聞く読書から、イメージを立ち上げる訓練をする。このことから、本の面白さがわかり、活字でもイメージをすることができる。

また、集団の前で読み聞かせしてもらうことと、家庭で読み聞かせしてもらうのでは、子どもにとって違う。集団では、読み聞かせを聞いて、自分と違う反応をする子どもがいる。そのことから自我を見出すことも出来る。

選書についても、本が面白ければいいものではない。子どもにあったものを、低学年高学年にわけて、選ぶほうがよい。

そして、今年から国の政策として、「読書と読み聞かせ推進事業」が行われる。読み聞かせが国として支援するべきだという意見がでた。読み聞かせでも、高齢化が進み、次世代に引き継がれていない現状が言われている。次世代の人が読み聞かせボランティアを続ける為、行政が支援しなくてはいけないのではないだろうか。

## 記録者の感想

学校図書館法というものがあり、学校図書館と一般の図書館は役割が違う、という意見があった。学校は、子どもが多く時間を過ごす場だ。その中で、本に親しみやすい環境があれば、本を好きになる可能性は大いにある。また、今回、松村さんの意見の中で、子どもがいい本を選ぶことが出来るようになれば、情報リテラシーも身に付くのでは、と言われた。学校図書館が子どもに本を紹介する場として、うまく機能すればよいと思う。

## 分科会 6 「学校と地域を結ぶPTA活動、おやじの会活動」



担当者：門田 コーディネータ：小山

発表者：佐々木・松岡・朝山

記録者：高知大・伊藤

デジカメ撮影：高知女子大・大谷

### ふるさと再生を願って ほたと田んぼの王国

東又ビオトープの取り組み（佐々木・松岡）

<事業の目的>

- ・「ふるさと」再生は、子どものふるさとへの思いから・地域を大事に思う心を育てる
  - ・自然と環境を体感し、考え思うことは、ふるさとへの思いにつながる
- “東又ビオトープ”（子どもたちの遊び場になる）  
草刈りから始め、それから1つずつ作業をすすめる（池掘り・配置思案など）

40～50歳世代が幼いころ遊んだ小池や池絵をイメージ

H13年から古代米の作成も（お年寄りとの関わりも）

H14合鴨有機農法にも挑戦（貴重な体験ができた、しかし天候不順で例年の7分作）

H14・5 ハード面からソフト面への移行

ホタルの飼育の取り組み ビオトープによって町全体の環境が良好へ

水車づくり

ビオトープのアピールも兼ねて夜市でメダカなどを販売

心をたがやす民話教室

総合的な時間で生き物地図を作成

<成功の要因>

業者に委任しなかった 地域の主体のもとに行われた

小学校が事務局となり、地域の事業を組織した

人と自然、人と人の絆をつくることを目的とした

つまり・・・、ボランティア意識ではなかった

<これからの取り組みと課題>

- ・管理の面では草刈り・鯉などの放流 ・利用と交流の広がり
- ・子どもたちの学びと遊びの場

<会場全体による感想など>

先生が地域に出て行く、このような事業には女性の活躍が重要。先生側にも自然を勉強する場。田んぼにこだわりを持っている。

「おやじが動けば世間が変わる  
おやじが動けば日本が変わる <おやじの会活動>」(朝山)

<おやじの会とは・・・、>

- ・学校でのおやじの居場所作り
- ・おやじの会の原点(飲み会)  
教員や町内会なども参加

酒を飲むことにより先生やおやじの考えの疎通を図る

- ・三世代交流・祖父母クラブ  
核家族化・熟年パワーの埋没・地域とのかかわり  
安心・安全活動「見守り隊」

<おやじの会の具体的な活動>

- ・ジャンプ台(縄跳びの二重飛びができないため)&缶ポックリ製作(子供たちが色を塗ったりし作業を子どもたちと共有)
- ・おやじの料理教室(子供たちと手打ちうどん・肉まん作り)いちから料理を作ることによって、作る大変さを子どもたちと知る

学校の先生も参加し非常に楽しめたものであった

- ・朝日を見よう隊「宿泊研修」 体育館で怖い話・学校で寝る・ラジオ体操など
- ・野菜作り

<おやじの会の発足・実践>

- ・発足した理由は、少し昔に学校が非常に荒れ、学校にクレームなどが殺到したため。それではいけないと、おやじが動き、学校を変えようとした
- ・実践の始まりはあいさつ運動から。最初はあいさつしなかったが、徐々にあいさつしてくれるように。
- ・そして、地域の人たちとも協力し、「地域の子供は地域で育てる・地域で育った子供は地域に戻る」という意識が生まれる

実践 淡路が峠展望台塗装作業(子ども&学校&地域が参加)、展望台付近に桜も植樹  
少年の気持ち=おやじの気持ち

男の口マン・チャレンジ(おやじの少年のころの夢が今の子どもたちも求めている)

<おやじの会の決まり>

- ・おやじの会の意見は飲み会の席で決める
- ・おやじの会に定年はない

いつまでも子どものような澄んだ心と壮大な夢を持って子供たちと接していく!

<会場全体による感想など>

おやじが楽しいものでないと続かない  
子どもたち同士の架け橋としても、おやじの会を発足  
おやじの会の活動に教員には強制していない(子どもの思いが分かる先生が参加)  
おやじの会による生徒のためにあいさつを始め、やる気があること見せる、おやじの背中を見せる



### 記録者の所感

東又のPTAの活動とおやじの会のどちらの活動にしても、“子どものため”と考えており非常にすばらしく感じた。自分の小学生や中学生のころを思い出しても、このような活動がなく、今日の分科会の話聞いて非常にうらやましく思った。このような活動が自分の時代にあったとすると、非常に有意義で楽しんで参加しただろうと感じた。今日の話は成功例で、実際には学校と地域が結びつくのは非常に難しい問題だと思うが、子どものためと思うと、このような学社融合というものは非常に大切なものであり、子どもの観点からしても必要不可欠なことであろう。今まで、知ることなかった学校と地域が関わりを持った活動を知れたことは自分にとってもプラスになった。

## パネルディスカッション 「学校と地域を結ぶコーディネータとは」

進行：濱田陽治

コーディネータ：宮崎稔

パネラー：橋本大二郎（高知県知事）、岸裕司（融合研副会長）、前田恵（徳島県海部町教育長）

ビデオ出演：庄司平弥（融合研相談役）

融合とは主体性があることと、教育内容の充実を図ることである。そしてそれは、人づくり・街づくり・国づくりにつながる。今までは地域の中の学校という考え方のコミュニティースクールであったが、これからはスクールコミュニティーという考え方への移行を目指している。

### 学社融合について

（宮崎）コーディネータとしてあげられるものは横と横をつなぐコーディネータ・たての中でのコーディネータ・次をつなぐコーディネータの三つである。今までは前の二つの考え方であったが、今回のフォーラムを通すことで三つ目の考え方も可能となった。コーディネータをするには、キーパーソンが必要だという考え方が多かったが、キーパーソンがいなくても自分たちのやり方次第ではできるのではないだろうか、という新しい視点の見方もあった。

Q ふるさと教員は断行したと思うのだが、そのことについてはどう思うか？

（前田）当時（H4～5年）に学校現場の用務員制度を廃止し、その代わりにふるさと教員を導入した。導入したことによって、高齢者が子どもに教えることは、高齢者もそのことについて勉強し、

現場に行くなどの前持った準備が必要という意味で、生涯学習にもなる。これがwin and winの精神である。Win and winの精神で、学校側にもふるさと教員にもメリットがなければならないが、現状では学校側の一人がちであることが否めない。

### Q 土佐の教育改革について

改革の理由としては、選挙で何をキーワードにするかで市民から「教育」について考えてほしいという意見が多く、「教育改革」を挙げた。最初に臨教審のようないろいろな立場の人々を集めて、改革に向けた会をつくる。学校の教育改革をするのであればソフト・ハードを含めて考えていく必要がある。教員の資質・開かれた学校づくりはこれからの土佐の教育改革の柱である。

### 記録者の所感

一日目の融合研の話聞いて、学社融合の考えは万人に受け入れられてもおかしくないほどに良いものだと思った。それを実施するにはさほど問題がなく、学校にも地域にもメリットになるものばかりだと思っていた。しかし実際は、人件費や行政側の反対など問題は山積みであった。容易ではないその取り組みだが、それに対して今回のような全国的なフォーラムを開催し、情報交換を行って理解を深めることが必要だろう。少なくとも私たちはこのフォーラムに参加したことで、学社融合の必要性・重要性というものを知ることができた。このような素晴らしい研修に参加することができ、本当によかったと思うし、これからの勉強にぜひ役立てていきたいと思う。

## 「融合フォーラム2005 in 高知」の感想から

アンケート提出 12名

提出が少なかったのですが、今回も全て原文のまま報告します。

### 1 あなたは、このフォーラムについて何で知りましたか。

- ( 1 ) 会報
  - ( 0 ) 新聞や雑誌の案内 (それは、 )
  - ( 10 ) その他 (HPから、メールで誘われて、会員の講演で、融合塾に参加して)
  - ( 1 ) 無記入
- 設問が、時代に合わなくなっているのを感じる。

### 2 このフォーラムは、何がよかったですか。(いくつでも)

- ( 11 ) 8 / 27 パネルディスカッション
- ( 7 ) 分科会 それは( 第1 ; 2名 第2 ; 0名 第3 ; 0名  
第4 ; 2名 第5 ; 2名 第6 ; 0名  
複数回答あり。また分科会名の記入なしあり。  
コメント有り。(分科会が6つは多い。実践発表が中心でないのが良かった(第一))
- ( 7 ) 会員発表「屋台」
- ( 8 ) 懇親会
- ( 8 ) 居酒屋
- ( 7 ) 8 / 28 パネルディスカッション

### 3 このフォーラムに対するご意見・ご希望

今回も、全国から集まって来られた“熱い方”にじかにお会いし接することができとてもうれしく思いました。来年の10回大会が今から楽しみです。また大阪の融合塾にも参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。

今回のフォーラムのテーマでもあるコーディネータですが、一日目のパネルディスカッションや参加した分科会でのコーディネータに少し不満を持ちました。持ち帰りたかったところ、聞きたかったところが聞けなかったという(前段が長すぎたのが要因と思いますが)、コーディネータが、「こねくりすぎたあ」という感じがしました。分科会については、そのテーマ・内容について掘り下げてじっくりと聞きたくて参加しています。コーディネータとしてのコーディネータ力をつけるためには何が必要なのでしょうか？自分自身も課題です。分科会等の内容を豊かに充実させるためには、フロアー力も必要と思います。今後も自分自身アンテナを張って勉強していきたいと思います。(辛口ですみません)



社会の一員であり民間の教育団体である私たちに、これから一体何ができるか、いろいろと考えるきっかけをいただきました。一番印象に残ったのは、多くの人との出会いです。その時にいただいた熱い思いや取り組みに対する気づきです。スタッフの方々ありがとうございました。本当に勉強になりました。大阪に帰ってがんばります。和田さん、こまやかな配慮が随所にされていて頭も心もいっぱいです。

いつも「なるほど」と思うことが多いのですが、パネルディスカッションの焦点をもう少し絞った方が内容が濃くなってみんなにも分かりやすかったのではと思います（一日目）。

創意工夫された企画で全てのものにまじめに参加しました。高知フォーラムに対する思いが伝わってきました。

全国から同じような志をもった方達がたくさん集まっておられて熱い思いを感じました。

地域と学校の両方の思いが聞けてよかったです。

楽しくできてよかったです。

初めての参加でした。まず参加されている会員の方のエネルギーが凄いと感心しました。全国の大会というのは、地方（高知）にいたるとたいへん刺激を受けます。融合の会員にも成り立てて実践も何もできていませんが、これから何かやれるかも・・・、やりたいという気持ちになりました。学校と地域の融合教育のとらえ方の違いを感じた。学校と地域が融合したらこんな風になるなという本質的な議論がもっと必要ではないだろうか？二日目のパネルは意味が無いのではないだろうか？融合の意味がわからないパネラーはいらないと思う。

みなさんの熱意とパワーを感じた。参加者名簿があると、今後の連携、ネットワークのためにも役立つ。但し、個人情報保護条例を考慮した上で。歓迎体制、受け入れの対応が行き届いていた。屋台フォーラムはおもしろい試み。会場の工夫が必要か？

現地の準備や当日の流れがスムーズでした。スタッフの名札の中の4人が「赤」で、何でも聞ける人をつけたのはとても安心でき良かったです。会場案内図を記載した袋、年報もとても分かりやすくして初参加の人にも役だったと思います。会場が一体的に動けたので、いつも一体感があり、とても良かったです。

#### 4 学校と地域の融合教育研究会に対して

関心が（ある；8名　ない；3名）

「ある」と答えた方に、それは、どんなことについてですか。

w i n & w i n の精神でというのがとても気に入っています。

学校・地域いろいろな立場の人が集まって、それぞれの思いをぶっちゃけられる所はなかなかないと思う。もっと地域にもこの様子を広く知って欲しいと思うが・・・その手段は？です。

地域とともに歩む。学校づくりのため。子ども達の豊かな心を育むため。

それぞれの地域で地域との関わり合いが違うので、いかにして自分たちの地域で実践していくか興味があります。

地域の方との活動について。

学校の方だけでは子どもを育てていくことができない（限界がありそれがどんどん大きく・強くなる）とかんじています。学力をつけるには土台が大切だと痛感しているからです。ここ2年、特に感じるようになり、昨年度学社融合というものを知りました。岸さんが、「子どもだけではダメ、大人も育つように」と言われた言葉が、大変強く心に残りました。大人社会が変わることを抜きに、子どもの育つ環境を良くはできません。ずっとこのことは思っていたものの、何をどうすれば全く手だてが見つかりませんでした。その糸口が見つかったと思います。あと数日で2学期が始まりますが、とても明るい気持ちで始業式を迎えられそうで、今、とてもうれしいです。スタッフの皆さん、本当にお疲れ様でした。良い研修になりました。

関心があったが、二日目のパネルを聞いたら、関心が無くなった。融合研としての今までの成果をはっきりし、これからの指針が何も見えて来なかったから。

今、生涯学習に携わっているが、ここ何年も前から学社連携・融合が求められながら、一向に進んでいない。モデル地区等を設けて、研究開発もしているが、波及効果があるとは思えない。なぜだろうか？という疑問をもって参加した。

「地域子ども教室の取り組み」の発表で思ったのですが、会員のできるだけ多くの発表時間を少ない時間でも確保してあげたいと思いました。会員発表を重視することとフォーラムの魅力との兼ね合いが難しいのですが・・・。

#### 5 その他（どんなことでも）

「できるときに、できることから、気楽に、楽しくやってみよう」という感じをなぜか持ちました。今回のフォーラムに参加して、コーディネーター力についていろいろと考える間（ま）をいただけたからではないかと思えます。いつもは熱くなる自分です。ニュートラルにして参加できたのがよかったです。非常に考えさせられる会でした。勉強になりました。

時間をかければよいものが生まれる可能性は高いが、負担とのバランスをとることも必要。

プログラム開発委員長の越田さんには、たいへんお世話になりました。資料、年報に費やした時

間は大変だったと思います。ありがとうございました。  
分科会の発表は、個性があってよいのだが、プレゼンの工夫が必要。特に時間を守ること、テーマに対して課題追究にやや不足。活動実践の自己満足に終わってないか。  
継続会員が増えてきたことは嬉しいのですが、会員だけで固まらないで意図的に初参加の人と交ざるように、特に会員は気を配らないと閉鎖的な会の印象を与えるかもしれませんね。  
「アンケート用紙に、FAXの後送でもかまいません」と次回からは入れて欲しいです。

ありがとうございました。

## 2 第10回学社融合フォーラム（東京大会）について

- (1) **名称**；第10回学社融合フォーラム in 東京
- (2) **日時**；2006年8月19日（土）13：00～20日（日）12：00
- (3) **会場**；「日本青年館」（東京都千駄ヶ谷新宿区霞ヶ丘7-1）
- (4) **内容**
- 1) 実行委員組織を立ち上げる  
実行委員は、本部役員・事務局員を中心とするが、東京周辺（千葉・東京・神奈川・北関東・静岡等）の会員や学生を中心に組織する。  
（今後の検討で）支部に企画を担当してもらうこともあるので、支部長には企画研究部員に入ってもらおう（要、検討）。  
実行委員長；宮崎稔  
企画研究部；部長「渡辺喜久副会長」  
テーマの設定。分科会・（パネル）の設定。その趣旨の検討。年報の発行。  
・全体会、分科会の設定の意味「何のために、このような事例・方法で行うのか」という趣旨を徹底的に討議して臨む。  
・全日程の記録を詳細に残す。  
庶務部；部長「野澤令照副会長」（応援；宮崎雅子本部事務局長。但し、本部事務局の事務内容との錯綜を避けるようにする）  
・会場との連絡や会員への広報・運営等の庶務一切を行う
- 2) その他  
準備会等の会合は、必要に応じて開催する。  
進捗状況を会員に適宜報告する。  
実行委員会組織図・タイムチャート等は、役員会で会長が提案し、承認を受けました。  
実行委員は、10月16日（日）に仙台で東京大会の役員会を開催し、東京近郊の方に実行委員として以下のように推薦があり、ご本人の了承を得ました。  
**「企画研究部」；テーマや分科会内容を検討したり発表者の人選や交渉を進めたりする**  
堀越幾男さん、青木信二さん、中川洋太さん、江口さん、塩野さん、望月さん、永谷さん、渡邊真知子さん、石崎さん、伊藤さん、櫻井さん、杉岡さん、國生さん  
上記以外の会員からの申し出や実情に応じたりして、適宜追加していくことがあります。
- 「庶務部」；事務的内容全般**  
前田さん、佐々木さん、小山さん、一色さん、齋藤さん、竹田さん、杉野さん、石岡さん、新井さん、坂口さん、山田さん、松丸さん、阿部道彦さん  
上記以外の会員からの申し出や実情に応じたりして、適宜追加していくことがあります。  
秋津の方には、別の形でいろいろなことを御願ひすることになるかもしれませんので、一応固定せずにおきます。

これからの会議では、会議だけをするのではなく、できるだけ「学社融合推進のためのコーディネート力」について、学習会をする予定でいます。実行委員でなくてもお出でください。

### 3 融合研設立10周年記念事業委員会について

10年を振り返り、さらなる一歩となるような事業を行う。

実行委員長：岸裕司副会長、委員に矢吹正徳、阿部道彦両会員

上記以外の会員からの申し出や実情に応じたりして、適宜追加していくことがあります。

記念誌の発行；単行本の発行を視野に入れる。

(案) a. 発足当時を語る座談会；記録として残していく必要があります

b. 発足から10年までを語る座談会

c. 支部のページ；東京に出て来られない地方の人が、支部活動を語る

d. 「私と融合研」；会員と融合研との関わり・始めの一歩等を寄稿していただく

その他の事業；今後事業委員会ですべてつめていきます。

### 4 役員会議報告

「融合研の課題」について、高知での総会で会長から提案のあった内容をもとに、「事務局体制のスリム化」と「勉強会の実施」について等を話し合いました。

#### 1. 事務局のスリム化について

提案；事務局長

##### 1 事務局の仕事内容の厳選と事務局体制のスリム化について

###### (1) 現状の事務内容と改善案

会員登録に関すること

会員継続の意思確認をする（メールで、郵送で）

継続の連絡があった会員の会費納入チェック

会員名簿を整理する

退会の意志表明者には、MLからの削除を管理者に連絡する

継続の意思表示をしても、会費納入をしない会員がかなりいる。催促のタイミングや回数が多い。難しい。（担当小山みさ監事）。

支部や近隣で一括すると減少しそう。（事務局長が確認して、一括納入をしてくれる会員と同じ支部（地域）であっても、本部に直接納入する人とうい分けて名簿を作成する。）

定の時期を過ぎたら、振り込み用紙を送付することで解消しそう。（事務局が担当する）。

新規加入者

加入の申し込みがあった時点で、「会費を納入すること」「MLに加入するならアドレスの連絡を」と指示する。

会費納入の確認をする。

MLへの登録を管理者に連絡する

会員名簿への登録をする

年報と資料集を送付する

会員一覧に登録するようHP担当者（佐竹さん）に連絡する。

###### (2) 会員登録事務の煩雑さを避けるために

更新は、従来通り「1年に一度」にする。

支部が設立されている地域や会員数の多い地域は、登録事務や集金等は支部でまとめて本部事務局へ一括報告（納入）する。納入手数料等は、本部の事務局で負担する。

振り込み用紙を同封して納入しやすくする。

### (3) 郵送事務の効率化を図るために

印刷会員への会報の印刷・帳合・綴じ込み・郵送  
資料集の郵送；フォーラムに参加しなかった会員のチェック、郵送  
資料集を希望する人への送付  
岸さんの会社へ郵送しておいて、事務局会議や役員会の時に早めに集まれる人で作業をしていた  
だくことで解消可能

### (4) 会計処理の事務局長への集中を避けるために

会計・会計報告・HP使用料の入金・資料集送付者への入金確認が主な内容  
事務局に「会計担当」を置き、事務局長が兼任しないようにする。また、「フォーラム会計担当者」  
を別にする。

### (5) 役員会議への提案について

会則の改正で事務局から提案することになったが、実質的には、事務局提案は会長等との連携  
が必要であり、事務局に関係するもの以外をあえて事務局から提案するのは煩雑である。会則の  
見直しが必要。

### (6) フォーラム関係について

会員の受付パターン作成（現地との連絡で）  
参加者の類別化と部屋割り等  
アンケート用紙の作成  
フォーラム記録の整理（現地との連絡で）  
フォーラム記録以外は、パターンができていますので、このままでよい。  
フォーラム記録は現地の意識により異なるので、全体として問題にして欲しい。

### 事務局員と組織図については、

事務局員；人選中  
組織図；人選終了後に作成する予定

### (7) 会計年度を変更する

現在、4～3月を会計年度として、会計報告や役員等の承認をフォーラム開催時の8月に総会で行って  
いるが、3ヶ月以内という法的な取り決めに整合させるために、7月～6月を会計年度とするようにします。  
このため来年度については、  
平成18年度4月～6月の3ヶ月分の、会計承認をまず行う。  
その後、平成18年度7～19年度6月を会計年度として、再度の承認を諮ります。

### 地方開催の全国フォーラムに本部や事務局がどのように関わるか。

これから、様々な地域で「全国フォーラムを実施したい」という要望が出てきたとき  
に、本部としてどのようなスタンスで対応するかということが課題となりました。再検討するということで、  
継続審議をしていきます。話し合われた内容は、  
融合研には、「内容の深化」と「地域の掘り起こし・活性化」の二極がある。現地の実態や思いを大事  
にしたいが、融合研のフォーラムであり現地は実行機関である。  
実施基準を設けて、役員会で了承した範囲なら現地に一任したらよい。その際、本部は側面的に協力を  
をしていく。  
本部から、実施に関わる運営資金を捻出できないか。

## 2. 学習会の実施について

担当は油谷雅次副会長(補佐宮崎稔会長)  
チーフ(油谷)は、学習するテーマや提案者等を企画・提案し、会員なら誰でも参加できるようにする。

フォーラム準備等の会合に集まるときには、参加者で学習会を実施して理論の構築をはかる。テーマは、大阪・盛岡・高知と続いてきた「融合のコーディネート力」を主とするが、第10回大会のテーマ等との関連も考慮する。また、会員にMLで希望を募る。

### 3. その他

#### 本部役員の仕事の明確化

とくに副会長については、役割を明確にする。

プログラム研究開発については、委員長にのみ負担がかかるようにせず、組織として係われるようにしたい。

#### ホームページの有効な活用方法について

担当者と話し合いながら、体制・内容を継続審議していく

#### 全国フォーラムの地方開催

11回目以降は、会員が少ないところでも無理なく開催できるようにしたい。

また、2～3年先まで開催地を決めておく(内定)と、ゆとりをもって準備ができる。

#### 個人情報の管理・事務局体制等、規約を改正する

##### その他(継続的に話し合っていくこと)

1)資料集の今後について;第3集までは、印刷媒体で発行する予定。

2)全国フォーラムの打ち合わせに対する旅費の補助

課題となっていることは、

・地方から、打ち合わせに上京する交通費の、ほぼ全額を会が負担している(辞退する人も有り)。また、現地へ出向いての打ち合わせは、他の理由(講演に行く等)に便乗しているので、支払いはしていない。

・「支部長を役員とする」ので、役員会や本部大会への招聘で相当な出費が見込まれる。会費の一部(会員数の2割程度)支部にバックして、支部活動費として捻出してもらおう等を考えないとならない時期にきている。これは、会運営上の必要経費であり、個人負担を強いるものではないと考えるので、本部で結論を出したい。

・各プロジェクト委員に対する旅費の補助(確認)

・たとえば、本部大会実行委員やプログラム編集委員として資料集の編集参加者には、交通費を支給したほうがよいか。(場合によっては、宿泊代の一部補助も)

・「ホームページ編集委員会等、プロジェクトが増えることが予想される。しかも人数が多いのでどうしたらよいか。これも会運営上の必要経費であり、個人負担を強いるものではないと考えるが、事務局としては厳しい。」ということで、結論を出しておきたい。

ということで、

手弁当が原則の会である。

本部で負担する内容である。

役員構成を変えたり(規約の改正が必要)、回数を限定したりすることも考慮したらどうか等が話し合われましたが、結論は出ていません。

#### 3)地方での学習会に補助金(5万円を上限に)が出ることも、周知されていない。

## 5 学社融合フォーラム in 仙台

## (ゆうごう子ども教室東日本ブロック研修会 & 会議開催要項を兼ねて開催されました)

### 1 趣旨

東北地区で展開されている学社融合事例を発表し、その意義や効果を確認し合うことを通して今後の活動の発展と新しい実践の創出や普及を促進する。

### 2 主催

学校と地域の融合教育研究会・地域子ども教室融合研運営協議会

### 3 内容

#### (1) 仙台市の事例発表 (3件)

社会教育施設(市民センター)がコーディネートして実績を残している事例  
地域住民の主体的な活動により、活発に展開している実践事例  
学校の働きかけによって地域に広がっていった実践事例

#### (2) コメンテーターによる事例の分析と評価

○宮崎会長、岸副会長、越田プログラム開発委員長の3氏によるコメント  
○全国の事例を紹介しながら、説明 等

#### (3) 会場の参加者との意見交換

### 4 参加者

・融合研会員           ・ゆうごう子ども教室関係者           ・嘱託社会教育主事  
・一般(地域住民、PTA、子ども会育成会、仙台おやじの会等の関係者など)

### 5 会場

・仙台市立黒松小学校   ・ホテル法華クラブ

### 6 期日及び日程

平成17年10月15日(土)12時30分～16日(日)正午

**【15日】・12時30分～ 「ゆうごう子ども教室・スマイルパーク旭ヶ丘」の見学**

会場校・黒松小の児童を対象に、「針穴写真器で遊ぼう」の出前教室を開催

・13時           学社融合フォーラム in 仙台 開会

・13時15分      事例発表&トークトーク

**・16時           ゆうごう子ども教室東日本ブロックポスターセッション**

・17時           閉会 (会場移動)

・18時30分      大懇親会(ホテル法華クラブ)

**【16日】・9時30分   ゆうごう子ども教室東日本ブロック会議**

**・11時           地域子ども教室融合研運営委員会 第2回**

\*13時           融合研役員会

**終了後の「メールでの反響」をお知らせします。(抜粋です)**

#### **東北支部事務局@フジオです**

新しい黒松小体育館で開催されたフォーラムは地元の皆さんや融合研の皆さんで楽しい時間を過ごさせていただきました。前端的に仕切っていただいた越田さん、野澤さん盛り上げていただいた全国の皆さんに深く感謝申し上げます。

東北にあっていち早く融合フォーラムを開催し、8年という月日がもたらした成果には驚かされました。これも、庄子さん、野澤さん、針生さんなど仙台の皆さんのパワーのなせるワザかと思えます。学校が開放されているのがあたりまえ、地域ぐるみで進めるのが当然という流れの中で大人の自立や責任、子ども自身の自立、学校の関わりなど、新たなステップも感じられました。子ども教室の元気な活動も今回のテーマであり、子ども教室が融合研にも新たな風となっていることを実感しました。子どもさんの顔や声が聞こえる楽しい2日間、本当にありがとうございました。今回はご夫婦での融合もとても勉強になりました。

#### **野澤@東北支部&子ども教室事務局でございます。**

ご参加くださった皆様、無事帰宅されましたでしょうか。15日、16日の二日間、仙台で開催致しましたフォーラム&子ども教室研修会は、お陰様で盛会のうちに無事終了致しました。フォー

ラムへの参加者は、融合研の皆さん、子ども教室の皆さんそして地元仙台の皆さんと、合わせて140名ほどになりました。これも一重に皆様のご協力の賜物、心から感謝致します。有難うございました。

北は北海道・歌登、稚内の渡部さんたち御一行（素敵な奥様かわいらしいお子もご一緒でした^^）、そして南は四国徳島から前田さんと、多くの融合研会員の方々が駆けつけてくれました。何といても融合研の皆さんの顔が見え、お話できるくらい勇気付けられ、元気付けられることはありません。本当に有難うございました。

藤尾さんからも発信がありましたが、今回はゆうごう子ども教室が各地で着実に実践を重ねている姿を目の当たりにすることができとても嬉しかったです。融合研の底力を見せ付けられた思いがしました。全国に地域子ども教室は数多くありますが、これほどバラエティに富み、それぞれの特徴を生かしながら、地域に根ざした活動を展開しているところはそう無いはずです。世に融合研あり・・・と、胸を張って行きましょう。今月末には津和野で、西日本ブロック研修会も行います。楽しみにしていますので、皆様よろしくお願い致します。

地元、仙台の参加者のことばです。「融合研てすごい集まりですね。こんなに凄いいと思いませんでした。」（地元、社会教育主事の一人）「とても素晴らしい出会いが、たくさんありました。ありがとう。」（黒松・親父の会のおとうさん）「全国から、こんなにたくさんの方が。。うれしいね。」（地元・学区体振の代表）「とっても楽しかった。いろんな方と出会えて、すごく嬉しかったです。」（黒松・子ども会育成会のお母さん。「構えないで何でも言い合えるって、いいですねえ。大好き。」（仙台：いろいろな市民活動に取り組んでいる女性）

今回、開催地仙台にもたらしただいたものは、とても大きなものがあります。皆様からいただいた熱い思い、大きな元気をしっかりと地元に戻元していきます。そして、融合研への新規会員として、仙台から3名、岩手から1名が仲間入りしてくれました。

### うたのぼり～渡部です。

数年前のどこかのフォーラム後、「ありがとう」「元気をもらいました」のML連呼に、参加していない自分は「話題をかえろ！」と心の中で怒っていた思い出があります。でも、今回は地域子ども教室関係者・家族も含め8名で参加。途中早めに退散する私たちに、「今日中に帰れるの？」という温かい？言葉まで頂戴。（稚内は22：00着）

同行者の声です。「出会いがよかった。元気になったな～」（最北稚内市在住の社会教育主事）

「まじゃりんこの子どもに考えさせる取り組みに考えさせられた」（地域子ども教室「ふらたま」スタッフA）

「宮崎さんと岸さんの事例後のコメントが正反対に聞こえた。わざと？」（「ふらたま」スタッフB）

「西中田の事例で保護者にアンケートをとる方法に気づいた」「生まれて初めて人前で話したかも・・・」（地域子ども教室「ふらたま」スタッフC）

「会場座席が前からうまるのがすごい」（教育委員会関係者）「帰りの車の中が話題豊富で楽しかった」（子どもの父親）観楓会気分の3日間に感謝します。（本当に家の近くは紅葉でした）

### ユーくん～す(岸裕司さん)

快朗で「屁へへの平ちゃん」こと、庄子平弥融合研相談役に、思いもかけずにお会いできたことは、うれしかったです。闘病生活のつかの間に、15分だけのほんのチョコットですが元気なお顔を会場に出してくださいました。早期の全快を、心から祈念してんかんね（平ちゃんは読めないとおもうけんど）！

さて、融合研の各地の子ども教室の発表についてです。

- ・みなさん、「イヤイヤやらされている」感じがまったくなく、「自主自律的で、やりたいからやっている」風に感じました。
- ・各地の特長に応じて、バラエティに富んでいて、さすが融合研仲間！と思いました。（自然活動、ポニーを飼う、地域祭りを取り込む、IT、英語.....）
- ・文部科学省の委託が終わっても、きっと全部が続くことと思いました。

- ・だからこそ、今から各地元の行政や教員の理解を得るためにも、たらしこむ必要性も感じました。（「たらしこむ」のは、「活動場所の恒常的な確保」などのことです）

<発表者のみなさんへ>

- ・越田さんが最後に伝えたように、「発表内容」を記憶が鮮明なうちに書き留めてくださいね。そして、来る2007年の「融合研創立10周年記念本」に、何らかで活かしたいと思います。

### 竹田 in 奈良です。

心底お世話になりました。昨日遅く帰ってきました。空港まで山崎さんに送っていただき、道中、様々な情報（特に会津若松の）をいただき、これまた前頭葉が真っ赤になってしまいました。もうパンク状態です。体はボロボロですが、心は仙台色に染まってほっこりしています。皆さんからいただいた名刺を整理しながらお一人お一人にお礼のメールを差し上げたいと思いつつ、まずはザックリとお礼をさせていただきます。

### 鹿沼北光クラブの渡邊真知子です。

よだれによだれを誘うようですが、仙台フォーラム良かったですよ～。これからどう学校に関わって融合が広がるんだろうという3事例をコメンテーターの宮崎さん、岸さんがそれぞれの立場でコメントし、ファシリテーターの越田さんがまとめるというものだったんですが、行政の融合、親父の会の融合、学校と地域の融合、それぞれ融合の仕方に特色があり沢山のことを感じることができました。

これは私が感じたことですが、常に広く子供の視点で融合を考える宮崎さん、地域の視点で融合を考える岸さん、システムとして融合を考える越田さん。この三人の方がいらっしゃったから学社融合は幅広く広がってきたことを実感してきました。この場を借りまして・・・本当に東北支部、仙台の皆さまありがとうございました。

### 宮崎稔です。

野澤さん、着実に進んでいますね。すごいです。地域にはたくさんの方が眠っています(?)。それを、上手に起こして黒松の応援団にしていく日々に関心しました。

さて、渡部さん。岸さんとの正反対のコメントは、「わざと」でも何でもなく、その時その時に感じたことを素直に出すという二人の手法のなせる本音です。いつも、私たちは、こうやって来ました。建前が先行する教員社会のこれまでからすると、その心地よさは強烈なインパクトでした。だから、融合研もタブーなく何でも言い合えるようにしたいと思い、会の基本理念にしています。

あの時の私は、あれほどの実践をしている寺岡のおやじの会だからこそ言えたものです。学社融合が進んだら、教育内容をも学校と共有していくことが、今後の課題なのではないかと考えているからなのです。地域の教育力はシステムだけでなく、学校が抱えている「指示待ちの子」「無気力な子」「依頼心の強い子」等々の課題にどう向かうかという目標にも、地域の立場としてアプローチしていく事ではないかと思っています。生活科や総合では、子どもからの主体性を大事にし、教師は支援に徹しようとしているのです。親切な大人がなんでもやってあげてお膳立てし、プロセスより結果を重視するからダメな子が増産されてしまっているという学校側から見た課題を、もう地域の活動理念に組み入れてもいい時期ではないでしょうか？そういう一歩を、「まじゅりんこ」や、本を紹介した「こどもがつくるまち」は歩み始めているから参考にして欲しいと思っています。

### 学社融合研究所の越田です。

仙台は楽しかったですね。仙台フォーラムのふりかえりには少し時間をかけなければと思っていますが、宮崎さんのメールに反応して一言、二言だけ。

>学社融合が進んだら、教育内容をも学校と共有して>いくことが、今後の課題なのではないかと考えているからなのです。さすがと思える意見ですね。そうなんです。地域の間人が「学社融合が進んだら、教育内容をも学校と共有していく」と考えなければ、学社融合をすすめる意味がなくなってしまうからね。地域側に立った発想ですね。学校側にいたら、こうは言えませんからね。学校側の立場しか考えなかったら「学社融合を進めて、地域の教育・学習活動を学校教育に取り入れていかなければ」としか発想しませんからね。地域側の課題にまでは、とても言及できません。



互いの教育・学習を主体的な意志に基づいて共有し、相互に高めあい、子どもにとってのメリットを生み出すことを第一の目的としながらあわせて、学校・教師としてのメリット、地域・大人としてのメリットを追い求めるのが学社融合システムですよね。もしも、ある活動が、学社融合という意図を持って実践されているにもかかわらず、地域づくり・まちづくりだけを目的とした活動になっているならば、確かに問題ですね。もっとも、学社融合として意識化されていない活動であれば学社融合の枠をあてはめて議論すること自体意味がないですね。むしろ、その活動に学社融合という視点から光を当て学社融合へと導いていくと良いのでしょうか。学社融合を意図した活動は、まだまだ少ないということでしょう。とすれば、学校の先生方が地域と融合しようという意識を学校内部にまた、地域の大人が学校と融合しようという意識を地域の中にそれぞれ自ら養っていく必要があるのでしょうか。（中略）

>地域の教育力はシステムだけでなく、>学校が抱えている「指示待ちの子」「無気力な子」「依頼心の強い子」>等々の課題にどう向かうかという目標にも、地域の立場としてアプローチしていく事ではないかと思っています。

>生活科や総合では、子どもからの主体性を大事にし、教師は支援に徹しようとしているのです。親切な大人がなんでもやってあげてお膳立てし、プロセスより結果を重視するからダメな子が増産されてしまっているという学校側から見た課題を、もう地域の活動理念に組み入れてもいい時期ではないでしょうか？

宮崎さんの意見は、学校側は地域をこう見ているぞという警鐘ですね。内部に居るからこそ、教職員の本音が見えるのでしょうか。こういう本音を知らずに、学校支援ボランティアのブームに乗って学校に通っていたら、大変ですね。こう思っている教職員を、ぜひとも仙台フォーラムに連れてきたかったですね。見せてあげたいこと、聞かせてあげたいことが山ほどあった仙台フォーラムでしたからね。（中略）

野澤さんの学校の先生方、渡辺さんの学校の中堅教員は会場に貼られたポスターを見てきっと、子どもにとっての地域の凄さに気づいてくれ本気で、本音で、それらの地域の教育力を学社融合というシステムを使って学校教育に反映しようと思ってくれたのではないのでしょうか。そうであれば、準備に奔走した一人としては物凄く嬉しいですね。

### **徳島県「前田恵」です。**

ありがとうございました。お世話になりました。いつもいつも勉強させて頂いています。話題が変わっているのに、今頃登場して誠に申し訳ございませんが、一言お会いした皆様方にお礼をと思い、遅まきながら登場させて頂きました。

仙台では本当にありがとうございました。発表されました3つの事例総てに主体的に、或いは受動的であってもそこに必ず女性の理解と活躍があってこそその発表であったと思いました。寺岡おやじの会の皆様方の活躍も、その裏にはお母さん方の理解があればこそその活動かなと、特にそのような印象を受けました。貼られたポストイトにおもしろい書き込みがありましたよ。（おやじの会の活躍素晴らしいですね。おやじの会に入りたいなあー。おばちゃんではいけないのですか。）なんてね。

いずれにしましても、東北・北海道の地で多くの方々の頑張りを知ることができ、参加させて頂き本当に勉強になりました。お会いしお話しさせて頂きました皆様方に改めてお礼申し上げます。

## **6 島根県益田市「子どもフォーラム」**

こちらも、終了後の「メールでの反響」をお知らせします。（抜粋です）

### **綺羅星7の大畑です！**

今、やっとパソコンに向かうことができました。子どもフォーラム in 綺羅星7が終わりました

た。融合研の皆さんのご支援で、私たちにとっても心に残るフォーラムになりました。市民の手でこのフォーラムを！これまで、教育委員会で行っていたフォーラムを市民の力で創り上げることにしたんです。会場も、私たちのネイチャーキッズ寺子屋（親子体験活動を創るグループ）の活動スポットである、中山間地の真砂地区にしました。地元のおじちゃん、おばちゃんと一緒に創り上げることにしました。古い小学校の講堂を会場にしたことも良かったです。分科会会場には、お寺の本堂も使いました。いい味が出たように感じました。

交流会は、地元の方の手づくりのみ！地元の皆さんにとっても心に残る、そして、元気の出るフォーラムになったのではないかと感じています。

### 島根県 渋谷 秀文です

益田市民でも「なんでわざわざ...。」と感じてしまう真砂地区で開催した「第5回子どもフォーラムIN綺羅星7」が無事修了しました。遠くからたくさんの方に参加していただき本当に感謝しています。なぜ真砂なのか...。感じ取っていただけただけでしょうか。これまでは、行政の手で開催してきたフォーラムを今回からは市民の手で開催していくことにしました。参加者も、登壇者も、地元の方達も、そして私達スタッフもみんながハッピーに、そして元気になれるようなフォーラムを目指して準備してきました。参加されたみなさん、いかがだったでしょうか？4分科会、16の実践発表、交流会、鼎談と盛りだくさんでした。宮崎会長、岸さん、越田さん、ついついたくさん出番を作ってしまったて申し訳ありませんでした。フジオさん、遠くから参加いただきありがとうございます。スタッフみんな感激していました。その他、熊本から参加していただいた山口さん、アトム保育園の市原さんにもいろいろと無理なお願い聞いていただいて本当に感謝しています。登壇者の皆さんや参加者の皆さんが元気になっていただけたらうれしいのですが...。少なくともスタッフは皆とても疲れてはいるかもしれませんが、とてもハッピーな2日間でした。本当にありがとうございました。明日からまたがんばろう！

**広島県 中村智成です。**カーナビが非常に過酷なワインディングロードばかり経路に指定してくださるものですから目を回しながらの帰路でした。

さて、今回の子どもフォーラムには感動の連続でした。途中から「このフォーラム自体が学社融合の実践の場になっている」ことに気づき、大畑さんに(いい意味で)騙された・・・と思いました(^ ^)

なんかミニフォーラムにしておくの勿体無いですよ。ぜひ全国の皆さんに体験していただきたいなあ・・・。来年の東京フォーラムの翌年、もしも全国フォーラムを続けて行くとしたら、ぜひ真砂地区で開いてほしいですね。問題は、全国フォーラムが開かれる7月～8月にイノシシが捕れるかということですね(^ ^; ;

実は今回のフォーラムに行く前に地図を見て、益田と津和野が比較的近くにあるので「津和野の子ども教室にも寄ってみたいなあ」と思っていました。日曜日だし、一人で迷子になったら日が暮れてしまうかなあ・・・なんて思っていました。岸さんと越田さんから「一緒に行こう」と誘っていただいて本当によかったです。

**宮崎稔です。**とっても素晴らしい島根県益田での「子どもフォーラム」でした。心地よい疲れと興奮でメールしています。渋谷支部長さん、大畑さん、それに準備をしてくれたたくさんの方みなさん、本当にありがとうございました。

真砂でやった意味がよく分かりました。地域住民500人(でしたよね?)の全員が喜んで迎えてくれ、一緒にフォーラムをするのを自分たちも喜んでるのがひしひしと伝わってきました。盛りだくさんの内容の、その一つ一つが実に丁寧に考えられて、意味を持ったものであったこと、分科会等の趣旨が実に的確であったこと、発表者の人選と内容の質が高かったこと、地元をうまくミックスし出番に無理がないけど出るべき人が出るべき場面で楽しそうに活動出来ていたこと・・・等々、来年の東京フォーラムでも見習いたいことがたくさんありました。本当に素晴らしいフォーラムでした。ありがとうございました。そして、お疲れ様でした。高知から仙台と続いて島根、融合研の活動の広がりを感じています。普通に生きていたら知り合うことなどなかったであろう素晴らしい仲間達と知りあえて、とてもハッピーです。

私が、何より良かったと思うところは、これまで融合研がほとんど取り上げて来なかった「就学前の子ども達（保育所等）」と、「障害のある子（軽度障害の子）」にもきちんと焦点を当てていたということ。（他の2分科会も、意味がありました）。テーマと内容が一致し「子どもフォーラム」にピッタリだったと思うのです。

今回のフォーラムで痛感したことは、テーマの位置づけが実にしっかりしていたこと、そしてそれに相応しい提案者の人選が見事だったということです。このことが、東京フォーラムでもこの点は、参考にしたいと思った点です。

進行をした3人のカワイイ小学生たち。澤江社教主事さんがあんなに誠意を込めて取り組んでくれたのに、おまけに思える程見事だったものね（ごめん！）。そして、地域を挙げての歓迎が、生涯学習そのものという感じで、天然の鮎を焼いてくれたり、シシ鍋をやってくれたり、翌日は、ギネスに挑戦の300升の米を使った押し寿司イベント・・・。

融合研は、これまで過疎地域の学社融合をあまり取り上げて来なかったけど、こんな立派な事例があるということでも、提案性があったと思います。

**高知の片山です。**「子どもフォーラム in 綺羅星7」本当にお疲れ様でした。

島根県益田市真砂地区、初めて訪問させて頂きましたが、素晴らしい土地でした。自然がいっぱいあって、昔ながらの学校があって、お寺があって、お家があって・・・でも、何より素晴らしいのは、素朴で、おおらかで、そして元気なお年寄り達、青年、子ども達がたくさんいたことです。高知県にある馬路村を今年の夏に訪れたときも同じような感想を持ちましたが・・・。真砂小学校の生徒は全校で15人ということだったのでしょうか？その内の何人かの子どもを見かけましたが、みんなとても元気で、存在感がたっぷりありました。これも、元気な大人達がいるからだと思います。

山里の小さな過疎の村でも、へこたれずに頑張ろうということで、押し寿司でギネスに挑戦というのにはちょっと笑ってしまいました・・・でも、そんなことで（失礼！）みんなが一緒になって本気で取り組んでしまうところがすごいと思います。今回のパズル押し寿司もそうですが、村中のお父さんお母さんが総出で取り組み、それをおじいちゃんやおばあちゃんが応援する。子ども達も一緒になってそれを楽しむ。それって素晴らしいことですよ！お金じゃなく、そんなことを地域のみんなで一緒に楽しむことが本当の幸せじゃないかと思います。

今回のフォーラムに参加して感じたのは、おじいちゃん達がたくさんいたことです。懇親会でも、そういう年配者の人たちがたくさん参加し、色々話をして下さいました。年をとっても、家に引きこもるでもなく、でも出しゃばるでもなく、淡々と、その場を楽しんでいらっしゃるようでした。そして、「こんな年寄りでも必要と言ってくれるのなら頑張ってなんでも協力しよう」と言っておられた75歳の朱山さん。きっと彼のようなお年寄りがたくさんおられるのでしょうか？高齢化が進む地域にあって、とても元気な、そして生きる勇気を与えてくれるような真砂地区でした。

今回、子どもフォーラムということで参加したのですが、私にとっては、これからの日本がどういう社会になるべきかを考えさせられるそんな有意義な場となりました。子どもだけでなく、親も、おじいちゃんおばあちゃんも、そして地域の人たちみんなが関わり合って社会が成り立っているのであり、子どものことだけを考えてもしょうがないんじゃないかと思えてきました。

私の現在住んでいる高知市内でも、地域（ムラ）が崩壊しかかっています。ごく近所であっても、どのうちに誰が住んでいるのか分かっているのはほんの一部でしかありません。お年寄りは、ご夫婦または一人暮らしの方がほとんどです。若い人と一緒に何かするという事もあります。そのうち体が不自由になれば特別養護老人ホーム行きでしょうか？確かにすぐ近くに量販店もあり、電車も通っていて便利ですが、それが果たして幸せでしょうか？

そんなことを考えさせられた今回の真砂地区でのフォーラムでした。大畑さんが、そんな地域を元気にさせようとこれまで取り組んできたことの素晴らしさが見えてきました。高知フォーラムで発表されていたのはこういうことだったのかと・・・。なにはともあれ、そんな機会を与えて頂いた大畑さんに感謝です！高知からはちょっと遠かったですが、でもはるばる行った甲斐がありました。これからも、真砂地区のような元気な地域を増やすべく頑張ってください！また、お会いできる機会を楽しみにしています。

**日本縦断して戻りました藤尾です。**初めての島根、初めての真砂だったのに懐かく、自分の母校に帰ってきた感じすらしました。地区のおじさんが、どこからともなく集まってきてししなべやあゆを準備しはじめたり、たえず動き回るこどもたちを学校のあちこちで目をかける大人たちがいました。これは、綺羅星だ、地球ではもう無くなった風景では・・・？あつまった人もスタッフもひとつのフォーラムの完全な当事者でした。しかけた綺羅星人の詳細な仕組み。ていないなご案内をいただいた日から、この演出がはじまっていたのですね。くやしいけど、だまされて感謝です。

**ユークんの岸 裕司です。**ともちゃんの「綺羅星人」なんて、ステキな愛称だね。私の出番は2日目だったので、1日目は分科会や郷土料理をお客さん気分ですっかり楽しみました。大畑さん、渋谷さん、ありがとありました。真砂小学校は、最近流行り始めた（例えば「三丁目の夕日」の映画化）昭和30年代の懐かしさがありました。学校校庭（正確にはすこし外してある？）の五右衛門風呂（しかも、露天の子ども用、家屋内の男性、女性用と3つも！）に子どもたちがフルチンで浸かる光景は、「これぞ子ども！」の風情をかもし出していました。

それと、真砂小学校区の方々（小学生が6人で、人口500人弱！）が、「ギネスに挑戦」した「巨大な押し寿司パズル（なんと、5メートル角！）が、ギネスに登録されると良いですね。ステキな2日間を、ありがと ありました。

また、津和野の増田清子さんや大内宗泰会員らにご案内いただいた「つわぶきワクワク広場（子どもの居場所づくり、融合研版）」は、津和野小学校の1教室にあり、町民、学校、教育委員会との融合の賜物と感じました。どうやって「教室をゲットできたのか？」の手順などを発信していただけると、融合研会員へのアドバイスになると思いました。

#### **学社融合研究所の越田です。**

ゆうごう子ども教室西日本ブロックの研修を兼ねて第5回子どもフォーラム in 綺羅星7に参加してきました。渋谷さん、大畑さん、他皆様、大変お世話になりました。「子どもの活動を支える大人の集い」というタイトル通りの集いでまずは元気な大人を生み出す仕掛けが随所にちりばめられていました。大変感動的な集まりでした。テーマに「子ども」という言葉が入るといつい「子どもの視点に立って」などとしがちですが今回は、「大人の活動」を論じるという視点で終始したことがよかったですね。また、ややもするとあれもこれもと盛り込んでしまいがちですが、テーマの具体化のために、徹底的に絞り込んだ内容構成はさすが社会教育主事の皆さんと思えるものでした。

担当が第1分科会でしたが発表者の皆さんの活動への熱い思いが分科会を大いに盛り上げました。融合研の皆さんにもお聞かせしたい発表でした。ここにも社会教育主事の皆さんの力を垣間見ることができました。元気な社会教育主事の元に、元気な大人、元気な地域が育つという感じですね。元同業者として、じ～んと来てしまいました。

さて、真砂で手にした島根の学社融合ですが

今回の集いの会場は、真砂小の教室や体育館、校庭を使いました。自分たちの管理施設のように使っていました。「どうして、こんな使い方ができるのか？」という問いには「いつもそうです」との答え

会場の真砂小学校の理科室に、お琴が3台置いてありました。「これって授業で使うのですか？」と尋ねると「はい、地域の方が来て教えているみたいですよ」さりげない答えでした。

第1分科会の発表された「子どもの居場所」は学校会場でした。学校が協力的であるという報告があり「どうして学校と地域がそれほどまでに友好的なのか？」と問うと「どこでもそうだと思います」これまたさりげない答えでした。

主催者の皆さんに、上のことを話すと「あちこちの学校でやっています」とのこと。そこで「だったら融合MLで情報を流して欲しいな」とお願いすると「あたりまえ過ぎて、あえてとりあげることでないと思うので」さりげなく、さりげなく・・・島根の学社融合はさりげなく行われているのでした。

会場の真砂小は、日曜日の30日が登校日でした。翌日の月曜日が振替休日とか。何のた

めの登校日変更かは確かめませんでした。今回の集いに関係していたことは確かです。今回の集いの企画の中心人物には、学校教育関係者が多数います。今は社会教育主事ですが、教員です。今回の集いには、教員としての彼らの力が活かされていました。それにしても、地域に出てきた教員は、何と元気なことか！今回の集いのテーマが、「子どもの居場所」でなく「学社融合」であったなら、上のことをもっと討論できたかなと思いました。学社融合を語る綺羅星7の席にもお邪魔したいなと思います。

子どもの居場所にしても 学社融合にしてもとにかく島根は凄いとった2日間でした。皆さん、ありがとうございました。

### **島根 綺羅星7 ネイチャーキッズ寺子屋 大畑伸幸ですありがとうございます。**

宮崎さん、岸さん、越田さん、藤尾さん、中村さんと、融合研の皆さんに綺羅星7を丸ごと見ていただきました。ドキドキものですが、これまた快感です。現場を見ていただくことが、一番ですから・・・。

さて、「さりげなく・・・」と私も口で言ってますが、平成11年から、島根県の単独事業として、それまでの教員の教育委員会への社会教育主事としての派遣事業を、地域教育コーディネータ派遣事業へと転換し、「学社融合」を主たる職務としました。これが、島根の転換でした。私たちは、まず、圏域の7ヶ市町村の教育委員会関係の関係しているあらゆる研修会を「学社融合」にしました。公民館関係から、社会教育委員関係、体育指導員関係、教育委員関係、県生涯学習センター関係、地教委研修関係・・・、創造できるものは、ほとんど「学社融合」の研修にしてみました。そして、2年間の県指定の学社融合モデル事業を受け、その発表会として「第1回学社融合フォーラム in 綺羅星7」を立ち上げ、圏域7ヶ市町村の教育委員会の共催で、分科会での事例発表を義務付けました。これが、現在の第5回子どもフォーラム in 綺羅星7につながっているんです。

平成16年度には、益田市で、子どもの居場所を「ボランティアハウス」として、小学校内に設置しました。（3年間で大きな小学校から2箇所ずつ、計6箇所開設）これも抵抗する学校長ももちろんおられました。しかし、これまでの学校の中に地域のおじちゃん、おばちゃんが入っていく営みが進む中で、最後は、あの手この手を使ってねじ伏せました。（この裏話は、ホームページ上にはかけません・・・）そして、現在益田市では、4箇所のボランティアハウスが開設され、人口5万人の町で、今年の4月から10月までの半年で、5000人の子どもの利用があり、述べ1000名以上の地域の大人がボランティアとして関わっています。ですから、真砂での様子は、真砂のコミュニティがまだ残っていると同時に、これまでの物語の成果の一端ではないかと感じています。

ちなみに、真砂のあのパワーの源は、あの中心となっているおじさんたちは、青年団を経験しています。また、イベントを始めるきっかけは、真砂地区内の馬谷小学校の廃校がきっかけとなっています。学校がなくなるという現実を突きつけられたとき、へこむか、立ち上がるのか・・・、この分かれ道は、どこにあるのでしょうか。私は、社会教育によるのではないかと感じています。今で言うところの生涯学習ですが・・・。

### **編集後記のようなもの**

遅くなりましたが、会報30号の発行ができました。今年は、野澤副会長の巻頭言にもありますように、例年のフォーラム(高知)に加えて、子ども教室が各地で開催され多くの成果を挙げることができました。来年は、融合研が発足後10回目のフォーラムが東京で開催されます。これまでの成果を振り返るとともに、新たな方向をじっくりと見据える出発点になることを祈念しています。

ちょっと早いですが、よいお年を！ (M)